

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第476号 2021年11月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

御縁をつなぎ御恩を送る

上床 美嗣

私は、東京の「社会科勉強会」という研究会に属し、「さざなみ国語教室」を毎回楽しみに読ませていただいている者です。

私どもの会報「逆転」に、昨年五月私を書いた「改めて学級・学校の役割を考えた」緊急事態宣言による一斉休校で「さざなみ国語教室」で取り上げていただいた御縁でこの原稿を書いていきます。

私は、元々は社会科でしたが、今は、大学で特別活動や学級経営・学級集団論等を教えています。ですから、吉永先生から、原稿の依頼を頂いたとき、何を書けばよいか悩んでしまいました。悩ん

だ結果、「御縁をつなぎ御恩を送る」という題で書くことにしました。

まず、「御縁」です。

平成二十年夏、私どもの会は「中世から近世へ 転換の織豊の近江」を主題に巡検を行いました。その二日目の夜、吉永先生に講演して頂きました。先生の丁寧な語り口と確かな実践に、専門教科は違っても小学校教員として多くのことを学ばせていただきました。それを御縁に、会員が所属学校の校内研究に二年間、吉永先生を講師にお招きしています。それらの仲立ちをしたのが私どもの会の主宰者目賀田八郎でした。目賀田八

郎は、私ども会員を、様々なところに御縁をつないでくれていました。

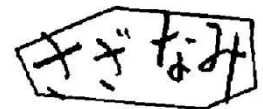
私も、公立小学校を退職して八年。二つの大学で非常勤講師をしています。これも先輩や同期が、御縁をつないでくれたからです。

小学校で目の前にいる子供たちも御縁があつてのものです。この子供たちに、先達や先輩から受け継いできた「御恩」生きている力を送るのが教員の仕事です。大学での仕事も同じです。御縁でのつながりは、学校世界だけではなく、社会全体にあるのではないでしょうか。

コロナ禍の中、教育実習校訪問で、多くの学校を訪問しました。全ての学校が、黒板の方を向いて、教員の話を一方向的に聴くという授業でした。子供同士の学び合いを組み込むには難しい状況が、今も続いています。給食も清掃も私語無しです。大学もそうです。大学二年生の中には「まだ友達がいらない」と言っている学生もいます。教室が学び合いではなくて、知識・技能伝達の場になっているような気がします。

一日も早く「御縁をつなぎ御恩を送る」賑やかな学校生活や社会生活が戻ってきて欲しいものです。

(東京家政大学／武蔵野大学)



▼本の帯「ノンフィクション本屋大賞受賞60万人が笑って感動した」にひかれて手にしたのが『ぼくはイエローでホワイトでちよっとブルー』（ブレイデイみかこ・新潮文庫）筆者は福岡県生まれ・平成8年から英国ブライトン在住▼本書については日野剛広さんの「あとがき」に次のように分かりやすく説明している「ブレイデイさんの、当時中学生だった息子とのふれあいを通して、〈地べた〉の英国を一緒に見つめていく物語だ。世界の縮図と言われる所以の英国の貧困、差別、分散は様々な形となってブライトンでつましく暮らす親子の身近にも忍び寄る」と分かりやすく説明している。中学生になった息子が差別や格差で複雑化した友人関係に相談されるたびに、「ようやくわたしの出る幕がきた」ととらえた日々の葛藤や息子と具体的な事例は、中学生の日常を色々と知ることができると「頭が悪いつて」とと無知というところは違う。知らないことは知るときがくればその時は無知ではなくなる」という台詞がある。この考えのもと、様々な日常のできごとを体験し成長していく姿が印象に残る▼思春期の子どもに対する対応や家庭教育のあり方、そして、多様な現代の教育課題について考える上で学ぶことが多い本である。

(吉永幸司)

「鳥獣戯画」を読む」から
学ぶ表現のテクニク
北川 雅士

「鳥獣戯画」を読む」(光村図書6年 創造)の学習に取り組んだ。今年度は、「鳥獣戯画」を読む」の学習を通して学んだ表現の「すこ技」を使いながら、自分たちの学校の良さや特色をパンフレットにまとめ、中学校で一緒に学ぶことになる中学校区の小学校に送って読んでもらうという単元計画を立てた。

導入で担任の出身校の紹介パンフレットを見て学習の見通しをもち、学習計画をたてて、まずは「鳥獣戯画」を読む」から今まで自分たちが知らなかった表現の「すこ技」を探す学習を行った。教科書の文章を読みながら自分が「すこ技」だと思った言葉や文に線を引いて付箋に書き出し、グループで観点ごとに①表現②絵の示し方③論の展開の3つに整理していった。

付箋を整理した後で、観点ごとに高畑勲さんの「すこ技」をまとめていった。この際に何度も確認したのは、「自分たちのパンフレットに活用できる『すこ技』である」という点である。文章から読み取ったものを自分たちの言葉で

「すこ技」として活用できる形にして一覧にしていた。

見つけた「すこ技」

- ・読む人が見やすいように絵を示す。
- ・身近な言葉を使いながら説明する。
- ・読む人に問いかけるように文章を書く。
- ・まず絵のことを説明してから、自分の思いや考えを書く。
- ・説明しやすいように資料を加工する。
- ・比喩表現や擬音を使う。
- ・絵や資料のどこを見てほしいか説明する。
- ・読者に共感してもらええる書き方を考える。
- ・読み手の心をつかむ表現をする。

この「すこ技」の一覧は、この後、パンフレットを下書きした後、推敲の際に、きちんと生かすことができているかの確認にも使用していきたいと考えている。

「鳥獣戯画」を読む」の学習は何度も指導してきたが、今まで以上に「パンフレットにいかす」ということを意識して学習ができたように思う。パンフレットがどのようなものになるか今から楽しみだ。

(彦根市立城南小学校)

俳句教室から
西條 陽之

季節を感じ、語彙を高めることを目的に全校での句会、詩人会を行って2年目となり、会を重ねるごとに子どもたちの俳句の腕も上がってきている。各学級から集めた句を廊下に掲示し、全職員が点盛りに参加する。高得点句は放送委員会が昼の放送で表彰するというのが本校の取り組みの流れである。掲示された各学年の俳句に「これ、すごいよな」「さすが6年生やなあ」などと話し合っている子どもたちを見ると嬉しく思う。俳句にはそれを詠んだ子の見方や考え方が込められている。全校で取り組むことで、小野小学校一人ひとりの子どものことを職員で語り合うきっかけにもなっている。

先日開催された「第3回近江の子ども俳句教室」では有志で募った句の中から学級の子が賞をいただくことができた。入賞作品が

FMくさつで紹介されるというところで、朝の会にオンデマンド配信を子どもたちと一緒に聴くことにした。学級の子の作品が紹介されると拍手が沸き起こり、みんな自分のことのように喜んでいった。「もっと聞かせて!」と、他の子がどんな句を詠んだのか、そしてどんな講評がつけられているのか、じっくりと耳を傾ける姿があった。秋、冬の部では、さらに多くの投げ句があるにちがいない。

俳句の学習や取り組みを通して、子どもたちの四季を感じる力は確実に伸びている。それと同時に、語彙の広がりや他者への関心も高まる一助となっている。俳句の良いところはその敷居の低さにある。1年生ならば、季語を並べるだけでも構わないし、字余りであっても語感やリズムが気に入ればそれでも良い作品たり得るのだ。十七音の短い句の中に、その子だけの感動や生き方が宇宙のように広がっている。こちらも俳句を見ながら、子どもたちの視点や成長に驚き、笑い、感動しながら素敵な時間をいただいている。

(大津市立小野小学校)

読み解く力の育成のために
川端 由起

「読み解く力」が昨今、滋賀県で提唱されています。「読み解く力」とは、例えば文章や図、グラフなどから必要な情報を取り出す力、それらを自分なりに深く考え、結びつけながらより深く考え、感じ取る力のことです。

ました。立派な出来からは程遠い、5月のフロア・ライオン、琵琶湖博物館の職員、夏休み、琵琶湖博物館に行くと、琵琶湖の環境のことを自分の想いで書くと、2学期に入り、読書感想文を書かしても、自分の経験が、本の主人公の経験を超えられない。と、中々良い読書感想文が書けない。入りの、校外学習の作文を書いても、聞いた感想を書いても、書いても、た。校外学習では、ヤンマーミュージアムに行き、校長先生の話で、は、大谷翔平さんのお話を、したのを、子どもたちは自分ごととして、努力したい、と書いていた。子どもたちが、実際に体験したり聞いたりしたことを、経験値は上がり、それが文章にも反映され、学校では体験が多くなる。大きな体験は、校外学習のみならず、日々の生活でも大切にして、読解力、向上させることではないかと、学校から行うお米感謝祭、5年生の音楽集会、調理実習、学級でのみんな遊びなど、どれも作文の宝庫です。一つ一つ丁寧に目を解き、子どもたちの心を耕し、読解力の向上を図っていきたく。

(草津市立志津小学校)

『2の1ありがとう』
川端 大介

十一月のある朝、学級の児童が「先生、学級通信でクラスみんなに伝えてください。」と勢いよく声をかけてきてくれた。

たすかります。2の1のよわいところは、聞くところなので、そこをみんなでおしてレベルアップしていきなよう！声をかけをして、お話を聞くと、おもしろい、みんな笑います。おもしろい、みんな笑います。おもしろい、みんな笑います。おもしろい、みんな笑います。

(守山市立立入が丘小学校)

音読
その具体を示す指導
杉澤周一

音読について問われ、一案を伝える機会がよくある。

45分の授業の始めの音読は、子どもが学習内容を捉えようとすると『学習指導要領解説・国語編』にある次の指導のためだろう。

一、二年「知識及び技能」
話のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。

特に「まとまり」について、言葉・文の意味を捉えにくい一、二年は、発達段階に照らすと「まとまりを捉える音読を日常の授業で継続することが必要だと改めて思う。文節、意味のまとまり、「一」「二」までのまとまりを段階とし先生の範読を追いかけて一斉で読むことを単元を通して繰り返し、単元末には一人で「一」「二」まで一気に音読できることを目指してはと伝えている。三・四年、五・六年もこの音読を実践しつつ学年の目標と内容を。一気にまとまりで読めれば内容を捉えている証拠と、それを単元のはじめから子どもたちと共有し目指したい。

45分の授業のおわり、数時間「まとまりの学習のおわり、単元のおわりの音読は、個々のペースで深めた学びにより読み味わいつつ、学びの変容、その自覚のためのメタ認知の機会としたい。目標と学習の足跡がわかる黒板、ノートを眺める。そして、じっくり自身の音読をすることで自身の学びの変容を自覚する音読。読んで終わりたいと伝えている。

単元を通して言語活動として音読を設定することがある。2年「ニヤゴ」(東京書籍)も叙述をもとに想像した様子や気持ち音読で表す。学年に相談を受け、一緒に授業を思い描いてみた。

悲しいから、悲しそうに読む。これで個々に練習し、ペアで話し相互に評価をする学習場面を多くみてきた。ただ、この「工夫」は曖昧と考え、次の提案をした。おこっている気持ちが伝わるように「強く、大きな声で読む。」工夫をしてみる。悲しいことが伝わるように、小さな声で弱々しく読む。」工夫をしてみる。

個々の音読練習をその具体の工夫でやってみる。その後「おこっていることがわかるように、強く、大きな声で読んでみます。」と告げてから音読する。聞く側は「強く、大きく読んでいて、怒っている気持ちが伝わりました。」「もう少し、大きく読むと、もっと伝わると思います。」と返せる。

この「工夫」について事前に学習し共有しておくことよいのでは。

速く・ゆっくり 大きな声・小さな声 強く・弱く はっきり・もごもご 間を空けて 語尾を上げ・下げ

これらを「音読の工夫」として掲示物にし毎時、板書、教室掲示。(本単元後も、機会あるごとに見て繰り返し定着へ。)この発声そのものの「工夫」により、めあてと実践、評価は具体になる。

実際の授業場面。一人の子どもが学習活動の最初にモデルとなるように、おこっているとがわかるように、大きく、強く、ゆっくり読みます。」と告げて読んだ。パチパチ。ある子どもが「もう少し、大きい方がいい。」先生が「もう一度、やってみる?」もっと大きな声で力を入れて読んだ。大きな拍手が沸いた。必要なら「もう一度」と伝えようと指導。(この「もう一度」も多くの先生方に提案。「もう少し」と評価を受けよう一度、やってみる。学習は何度か「もう一度」があるのが普通ということ全員が共有して粘り強く学びを深め、高める。

もう一度、実際の授業の終末。(その前から続けて読む時間がな。く)「ニヤゴ」だけ、もう一度自分の「工夫」で音読をして終わります。せいのつ「ニヤゴ」その発声は、同じように揃って聞こえなかった。速く、ゆっくりに強く、それぞれの「工夫」の違いがあったようだ。

(東近江市教育委員会 学校教育課)

編集後記

十月例会(四七五回)の提案は北川さん(城南小) 研究主題「ICTを活用した国語学習の取り組み」研究教材「やまなし」(6年光村)一人一台の端末使用のもと、経験者させることから各教科活用方法を工夫をする段階の実践報告

▼国語科では、「話すこと・聞くこと」の単元でビデオとボイスレコーダーを活用して話し合いの実践。オクリンクを取り組んだという経緯がある。提案は「やまなし」の指導におけるタブレットを活用について▼授業では「五月」と「十二月」を比べるという学習活動を設定した。オクリンクというアプリケーションは、カードが使える、画像で書きがができる。カードとカードをつなぐ、提出されたものを全体に公開できるという利点がある。それを生かした実践であった。具体的には、「かにの兄弟の様子」「谷川の様子」などの、読むことの視点を決める。大事と思える言葉を選び友達と交流するということであった。選ぶことや交流することに必要と書くことについては、日頃は苦手に思っている子ども、意欲的に活動に取り組んだという。▼研究協議では、各郡市各学校における一人一台の端末活用の実態を交流した。結果は研修の方法や活用の仕方など幅広く考えられた。さらに「やまなし」の授業を通して、学習目標や端末の活用成果や実践課題などを考える機会になった。

▼巻頭には、上床美嗣先生から、玉稿を頂きました。深謝。(吉永幸司)